



赤城山南麓の開発と遺構《女堀》

峰岸純夫＝東京都立大学人文学部助教授（日本中世史）

能登 健＝群馬県教育委員会文化財保護課（考古学）

①はじめに

群馬県内では、関東平野の北西端と関東山地を境するように利根川が流れている。赤城山は利根川左岸にあり、那須火山帯の南端に位置する複合成層火山で、最高頂（黒松山）は標高1,828mである。北西麓は、比較的大規模な幅射谷が発達した丘陵地形であるが、南麓では浅い幅射谷となだらかな原形面からなる広大な裾野地形となっている。東は渡良瀬川によって形成された大間々扇状地に接しており、南端は旧利根川の浸食による崖線と区切られている。

赤城南麓は、古くより開発が進んでいる。縄文、弥生時代の遺跡も多く、古墳時代では、赤堀茶臼山古墳、荒砥二子山古墳をはじめ多くの古墳群が点在している。奈良・平安時代に入ってから、遺跡はさらに増加し、原形面の台地上や、浸食によって残された微高地上の多くは、これらの遺跡が占有している。平安時代末には、小河川や湧水によって開析された支谷に水田経営が認められ、台地上の畠作耕作も12世紀代には大規模に行なわれていた。これらの農業開発は、その後も進捗の度を速め、耕作適地の大半は近世後半までに開発されていた。

このような積極的な農業開発の反面、各時代ともに水不足に苦慮していた。水田開発が台地上に及んだのは明治以後であるし、畠作地帯での早魃被害は戦前まで続いた。山麓を流下する小河川は、その水量や比高差によって、耕地拡大の限界を桎梏としてもっていた。赤城南麓の開発の歴史は、常に利根川の利用であった。女堀の開削はその端初となるものである。

②女堀の発掘調査

女堀は、標高約95mの等高線に沿って開削されている長大な用水遺構である。前橋市上泉町付近の旧利根川（現桃木川）を取水点とし、終末点の東村西国定まで幅15～20m、深さ3～4mで、約12kmにわたって開削されている。終末点では、独鈷田と呼ばれる谷地に落水させる構造をとる（以下、図1および裏表紙参照）。現在は放置されており、また典拠となる文献史料もない。そのため謎の用水遺構として注目されていた。発掘調査は、女堀通過地域のほぼ中間地点にあたる前橋市東大室町と飯土井町の部分が対象となり、1979年10月から翌3月までの6ヶ月の期間で行なわれた。

調査所見のうち最も重要なことは、女堀は未完成であったという事実の検証であった。発掘調

査の進行に伴い、女堀は完了直前に何らかの理由によって工事が中断されており、通水がなかったことが判明した。

東大室地区は、飯土井地区から延びる女堀が神沢川を渡河して石山丘陵（泥流丘）に入る部分である。石山丘陵の西端には、表流水を伴う小規模な谷地がある。この地区は工事未了の部分で、工事中断時の状況が残されており、当時の土木工法の実態を解明する良好な資料が得られている。排土の土層調査と溝底面の精査によって、女堀は、三段階の段掘工法が採られている事が判り、小間割と思われる掘削の最少単位も確認された。さらに、鍬や鋤跡の検出によって、具体的な掘削工程或使用工具の推定も可能となった。

女堀の溝底には、無数の足跡も残されている。掘削工事は、相当なぬかるみの中で行なわれたのだろう。法面からの湧水を処理するため、掘削は、常に北側から行なわれており、溝底には、工事中に湧水や谷地切断により流入した表流水を処理するための溝が設けられている。湧水処理溝の一部は、掘削完了部分で通水をささげるように埋めもどされた上に設けられている。女堀は、北側からの段掘工法を採っているため、排土は南側に集中している。この地点では、女堀開削時の旧地表面の確認調査を実施した。その結果、東大室、飯土井両地点共に広範囲な畠跡が検出された。女堀は、当時の重要な生活基盤である畠作地帯を貫通して計画されたことになる。なおこの畠は、1108年（元仁元年）の浅間山噴火による降下火山灰層の直上に経営されており、女堀はこの噴火による災害の数十年後に計画されたと考えられる。

一方、併行して行なわれた女堀全線踏査の結果も、新たな知見を加えた。女堀は未完成であるにもかかわらず、全線にわたって掘削が行なわれている。これは、各工区が設定され、全線いっせいに工事が着工されたことを物語っている。踏査中に平面幅に食い違う部分が数ヶ所で確認され、工区が存在を想定しえた。これらの地点は、発掘調査によって工区境であることが追証されている。なお途中分水の構造は、現在までのところ確認されていない。

女堀の起点上泉の標高は97.5m、終点西国定では90mで、平均勾配は1,600分の1である。この低落差の勾配を維持するには、統一的な測量体系が要求される。女堀通過地点には、一段と

高いマウンド状の高まりが点々と確認されており、測量台の可能性も出てきている。

とにかく、女堀は、用水としては機能しなかった。開削途中で放棄されており、工事は完成せずに終わっていた。女堀は、通水機能のみではなく、貯水機能に重きをおいた溜井として計画されたとの見解もある。赤城南麓における河川水と湧水を同族連合の勢力地内で効率的に取水できる部分に連続した溜井を構築し、在来河川への水の補給を行なおうとしたとする考え方であり、検討すべき見解である。

③女堀の開削と洺名荘

大間々扇状地には、二つの荘園が12世紀中葉に相次いで成立した。西半部のⅠ面には、粕川西岸の一部も加えて洺名荘、東半部のⅡ面には新田荘が成立し、ほぼ早川をもって境界とした。洺名荘は、鳥羽上皇の中宮待賢門院璋子によって1130年（大治5年）に建立された仁和寺法金剛院の所領として、おそらく寺院建立と同時に立荘・寄進されたものと思われる。藤原氏（秀郷流、洺名大夫兼行—成行）らが、現地で開発などで集積した私領を法金剛院に寄進するという形をとって洺名荘が成立し、さらに権門の権力と中央政府・上野国衛の承認によって律令制下の佐位郡のほとんどが洺名荘にくみこまれた（別称：佐位荘、西荘）。このことは、中世洺名荘の範囲が、洺名・植木を中心に、西は粕川以西の波志江・赤石（伊勢崎の古名）・茂呂、東は香林・花香塚・木島などの諸郷に及んでいることから裏付けられる。藤原氏（洺名大夫系、のちに足利氏）は、洺名荘の下司（荘官）として引き続き勢力をふるった。

これにややおくれて、鳥羽上皇の建立した金剛心院の所領で、花山院家藤原忠雅の管理する荘園として、1157年（保元2年）に新田荘が成立した。新田義重は、新田郡西南部の「空閑地」（開発地）を上級権門に寄進して下司となった。まもなく、洺名荘と同様に新田荘は新田郡一円に拡大された。

女堀の終末点が洺名荘東北部の西国定地先にあることから、これが洺名荘の開発を目的としたものであることは明らかで、また大胡郷・大室荘・洺名荘と12kmの長さにわたって開削されていることは、洺名—足利氏を中心に、大胡氏、山上氏、佐位氏など赤城南麓の秀郷流藤原氏の同族連合の勢力扶植を背景にしていることを想定させる。また女堀と併行して走る東山道（東

道)が工事に果した役割も無視できない。
 瀧名荘の下司で秀郷流藤原氏の瀧名大夫系の嫡流足利氏(俊綱—忠綱)は、治承・寿永内乱期に木曾義仲・志田義広と結び、上野では新田義重と争い、下野では源頼朝と結んだ小山朝政と対立し、1183年(寿永2年)に滅亡する。したがって女堀の開削は、瀧名荘の立荘時の1130年(大治5年)から藤姓足利氏の滅亡のこの時点の半世紀の間と推定される。

藤姓足利氏が、本拠地を瀧名荘から下野足利に移す理由、あるいは藤姓足利氏の滅亡などの事情が、女堀の不成功、突然の工事中断とどのように関連するかは今後の研究課題である。
 なお女堀の地名は、群馬・埼玉の各地で見出され、そのほとんどが以前に使用された廃溝に名付けられている。すなわち、役に立たないという意味の「姥」(おうな、老女)からきている名称と考えられる。

④溜池灌漑と河川灌漑

赤城南麓における水田農耕の開始時期は、不明な点が多い。利根川を挟んで臨接する前橋台地では、4世紀代には本格的な水田耕作が確認されているし、6世紀代と11・12世紀代の埋没水田も火山灰層下から続々と検出されている。赤城南麓の旧荒砥村地域(前橋市東部一帯)は、6・7世紀における上毛野氏の本拠地と推定され、農業基盤の優位性が主張されてきた。しかし、考古学的にはそれを立証する資料は未だ摘出されていない。近年になって、輻射谷である谷地部分で11・12世紀代の埋没水田が数ヶ所で検出され、土層調査でも同時期の水田適土の存在が確認されるようになった。少くともこの時期には、谷地水田の開発が盛んに行なわれていたと考えられる。

赤城南麓は、火山性山麓特有の水欠乏地帯である。水田地帯は、山麓を流下する小河川縁辺や湧水池下に延びる谷地に限られ、これらに伴う帯状の水田が発達している。現在でも台地上の水田は少く、多くは桑園となっている。初期の水田は、湧水池利用の灌漑に依拠していたと思われる。しかし、狭少な谷地水田の開発であっても、水田面積の拡大に伴って水不足は大きな問題であったろう。

現在ある赤城南麓の溜池は、湧水池利用のものが多く、必然的経過をたどっている。それぞれの成立年代は不詳であるが、この地域には、現在総数153ヶ所の溜池が点在している。しかし、

その総貯水量は約401万 m^3 で、受益面積は約1510haにすぎない。これらの溜池は、大半が小規模なもので、受益面積が5ha以下のものが30%もあり、10ha以下のものになると65%以上にも及んでいる。受益面積の中には明治時代以後の新開田も含まれており、各溜池は、第二次大戦中に完成した大正用水によって用水の補給が行われている。大正用水は、当初新田町生品付近(大間々扇状地Ⅱ面)までの送水が計画されていたが、途中の溜池への分水が多く、水量不足のため、現在では赤城南麓西端の早川までで中断されている。このように赤城南麓は、湧水池利用から溜池灌漑を経て、大正用水による利根川からの用水補給によって、水利対策は一応完成した。

一方、大間々扇状地Ⅰ面では若干様相が異っている。この地域でも赤城南麓と同様に湧水池利用の灌漑から出発しているが、水田開発については、当初から用水不足の状態であった。女堀は、今回の調査によって途中分水の可能性が薄れ、終末点送水の可能性がより強くなった。その対象地は、瀧名荘の存在する大間々扇状地Ⅰ面下の沖積地一帯である。荘園の発生と共に盛んになった地域開発で、この地は利根川からの河川灌漑が必須であった。しかし、強大な権力と膨大な経費を費してのこの計画は、実行されて、そして失敗に終わった。

瀧名荘への灌漑は、この他に粕川からの取水が考えられる。しかし、女堀開削に先立ってこの作業が行なわれた証左はない。現在、粕川は赤城山頂小沼(計画貯水量35万 m^3)の水を流し込むことによって灌漑水利を行なっている。小沼利用の河川灌漑は、少くとも14・15世紀に入ってから行なわれたと推定できる。1706年(宝永3年)に至って伊勢崎藩によって佐波・新田用水(八坂用水)が完成している。これは、旧利根川流域の荒砥川から取水(現在は桃木川)し、その一部を粕川へ落し、さらに下流はかつての瀧名荘の一部の境町周辺にまで送水している。また大間々扇状地Ⅱ面では、扇端部に湧水池が一線に並び、井のつく地名が点在している。Ⅰ面と同じ様相を示しているが、ここでは渡良瀬川から引水された新田堀によって水不足を解消している。

⑤おわりに

赤城南麓は、谷頭の湧水池を利用して水田耕作が開始されている。一見良好な溜池地帯とみえ

るが、その内容は水不足の歴史とも言えよう。山麓や扇状地地形に特有な湧水利用の灌漑は、耕地拡大におのずから限界が生じ、生産力の増大に伴って水補給の問題を必然的なものとする。新田荘地域(大間々扇状地Ⅱ面)の沖積地開発と新田堀との関係もこれを想起させるには十分であるし、瀧名荘地域における女堀、佐波・新田用水もこれを象徴的にとらえることが出来るものといえよう。

これに対して、隣接する前橋台地では、対照的な一面をみせている。1600年代に完成した天狗岩用水は、利根川より取水し、前橋西部から玉村一帯に流域約2000haの灌漑面積を有している。これ以前の玉村は、“平々たる野原”と称された荒涼とした地域であったという。しかし、近年の考古学的成果によって、表土下に火山灰に覆われた多くの水路が検出されている。続々と検出される埋没水田も灌漑用水を伴う構造であることが判明しつつある。また現存の条里遺構も中小河川からの水補給が行なわれている。湧水利用から出発した赤城南麓・大間々扇状地一帯に対して、前橋台地は、水田耕作開始時より用水系の発達が見取される。利根川を挟んだ両地域は、その地形的特徴から、おのおの違った農業発達を示している。今後の考古学的成果の集積によって、利根川上流域の開発の歴史は、さらに鮮明になるであろう。

(文責：①②④⑤＝能登，③＝峰岸)

表1－女堀関連年表

	<峰岸>
天正1年(1108)	浅間山爆発。火山灰で田畠潰滅(中右記)
天正2年(1119)	荒野五千町歩の攝関家荘園。立荘を停止される(中右記)
大治4年(1129)	火山(浅間山か)爆発(長秋記)
大治5年(1130)	仁和寺法金剛院の創建(瀧名荘の成立)
保元2年(1157)	金剛心院領新田荘の成立(正木文書)
長寛1~3年(1163~1165)	青柳御厨の成立(神宮所領法文)
寿永2年(1183)	藤姓足利氏の滅亡(吾妻鏡)
弘安8年(1285)	上野守護安達泰盛滅亡(霜月の乱)
嘉元1年(1303)	利根川変流(伊勢崎風土記)
元弘3年(1333)	鎌倉幕府滅亡
応永年中(1394~1428)	利根川変流(上野名跡誌)
応永27年(1420)	洪水(神明鏡、奈良原家年代記)
応永34年(1427)	洪水(奈良原家年代記)